

繭玉

路地から街道に出た途端、乾いた風が吹き抜けていきました。秋分を過ぎたにしてはいやに暑い日、身体にまとわりついてきた熱の帯がほどけていきます。いつの間にか陽はじゆうぶん西に傾き、まくり上げた袖をおろしてもいい程度には涼しくなっていました。冴えた空気を心地よく切り進んで信号を渡れば、再び路地。気安い空気に歩調が緩んでいきます。帰路の辻で、ふと足が止まりました。

住宅街の半端な空き地を埋める猫の額ほどの緑地には、簡素な岩組みとベンチ三組。一方通行の細い路に寄り添う、細長い土地です。ベンチは程好い感覚で路を眺めています。背後に木々が気持ち良く伸び、左右に岩組みが風を和らげるここは、意外に居心地がいいのです。

まだ空も明るく、灯り始めた水銀灯が眩しくなるまで間があります。たまたま誰もいない安心感もあってか、気づくと彼は腰掛けていました。まとまった仕事有一段落して、人並み以上に早く帰れると、こんなに気持ちいい空気に出会えるんだ…土

日の散歩では味わったことがない解放感です。

うっとりするほど空が澄んできます。ひんやりした空気の喜びも、あと三十分もすれば寒さになると顔を戻した時、人通りが途切れてなお感じる視線。向こう側のベンチに子供が一人、座っています。男の子でしょうか、女の子でしょうか。年の頃は十より少し下か、女兒の白さを思わせる肌に刻まれた、細く黒い目がひどく印象的です。手に白く丸く柔らかそうな玉を持ち、視線が合うと微笑みかけてきます。玉を透かし見るように上に掲げ、彼に向き直りました。そのまま真っ直ぐ向かって行きます。

彼は見知らぬ子の行動に、少し身体を引きました。子がふんわり破顔すると、笑いで細い目がなくなり、妙に人懐こいのです。つられて微笑んだ瞬間、空気の塊が音を立てて二人の間を突っ切っていきました。ほんの十分程度でずいぶん暗くなってくると思っていると、その子が右手を掲げました。人さし指と親指の間には繭玉があります。街灯を淡く反射する様は、魂をつまんで見せているようです。

…きれいでしょう？

髪も短く声も低いけど女の子のようです。

……きれいだね。蚕の繭か、理科の授業？

……うん、自分で育ててるの。

ふうんと努めて穏やかに返事をするものの、何を考えているのか、彼は頭を巡らせています。子は頓着せずゆつくりと見上げます。彼もちらりと空を見ます。

……もつと見て、ね？

一瞬突き出しかけた唇を引つ込めた彼は、真剣な子の表情に目を残しつつ、改めてゆつくり見上げました。西に去ろうとする雲のかけらとは別に、瓢箪のような形で薄紅色に輝く雲が浮いています。ほお。思わず感嘆の声が出ました。

ね、と応じる子と目が合いました。すると、再び繭を掲げます。

……これ、知ってますか。

……蚕の繭、つてさつき言ったよね。

子は頷きかけて、小さく首を横に振りました。

……じゃ、違う虫かな。でも、繭だよね、これ。

……繭だけど、ただの繭じゃなく、とつても大切な繭。

出来るだけ丁寧に微笑んでいた彼が、思わず思案顔になりました。普通に結婚でもしてればこれくらいの子がいたんだろうけ

どな、子供と縁がないしどういふ顔をしたもんだか。はつと気づいて口元だけでも笑みに戻そうとします。

……じゃ、どんな繭かな。

……旅をする時に、これが一番大切なものになるんです。

……ふうん

返事はしたものの、曖昧な笑顔で子を眺める彼は、大人びた口調の子だ、この歳で旅なんて言葉、知ってるんだ、それにしてもしつたい何の話なのか、と巡る頭から、漠然と質問が口の上りました。

……で、旅は誰と行くの？

……行くのは、あたしじゃなくて、おにいさん。

きよとんとした彼は、中性的な目で見つめられてしばらくしてからやつと自分を指差し、その子が頷くのを見ました。

……これを持つて？

うん、と邪気のない顔で質問に首肯します。微笑みを崩さず、しかし静かに真剣な目に、からかったりでたらめを言いたいのではない、ということだけは、彼にもわかりました。子供とはいえ、とにかく一人の人間ではあるのですから、うまく言えないことが多いだけなんだろう。とりあえず真面目に聞いてみま